

Title	ヒックス利子理論について - 安井琢磨助教授に答ふ -
Author(s)	高田, 保馬
Citation	経済論叢 (1943), 57(6): 495-511
Issue Date	1943-12
URL	https://doi.org/10.14989/132053
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第卷七十五第

口繪 經濟學部學徒出陣壯行式寫真

ヒックス利子理論について……………高田保馬

増税問題……………汐見三郎

強制及び勸誘貯蓄の體系……………小島昌太郎

近代資本主義經濟の二つの側面……………青山秀夫

アンシアン・レジームの經濟段階……………河野健二

選擇理論の立場から見たる
デュブイの相對效用について……………園正造

戰時財政と經濟統制……………有井治

彙報

本誌第五十七卷總目錄

行發月二十年八十和昭

經濟論叢

第五十七卷

第六號

(通論卷第四拾二號)

昭和十八年十二月發行

ヒックス利子理論について

——安井琢磨助教授に答ふ——

高田保馬

安井琢磨助教授は經濟學論集第十三卷第一號(昭和十八年一月一日發行)に於て、私の同誌に寄せたる「ヒックス利子決定論の分析」に對する批評を公にせられた。本稿はそれに答ふる目的を以て執筆するものである。たゞ本來ならば經濟學論集に於て之を公にすることが當然の順序であらうと思ふけれども、なるべく年内に公表したいといふ希望のために經濟論叢の紙面を借ることにした。このたびは粗枝大葉のみを述べて置いて、やがて十分な展開を加へたる私見を公にしたいと考へてゐる。

同教授が私見に對し詳細且つ犀利なる批評を以て教示を惜まれざりしことに對しては、個人として深く其勢に謝するとともに、日本の學界の進歩の爲に慶賀にたへざる次第である。たゞその主張の方向については私見必ずしもそれと一致せぬ。私は同教授の詳細なる説明にも拘はらず、飽まで私見を貫く外なきを思ふ。従つて重ねて

述ぶるところはヒツクスの利子決定に關する説明の如何に經濟の真相から離れてゐるかにある。ヒツクスの經濟理論の卓越せる地位にも拘はらず、此點に關しては依然として其所説を承認することを得ず、従つてそれに適切なる説明を加へて極力之を支持せんとする同教授の立場と相離れざるを得ざるものである。

二

問題は可なりに複雑であり且つ多面的であり、如何なる點から又如何なる順序に於て之を説き始めるかについては選擇に困難なる事情もある。けれども一應かういふ進路をとらうと思ふ。まづ、私見の立場とヒツクスの立場とが如何なる點に於て異なるかを明にして、同教授の批判乃至異論の由つて來る所を明にしたい。次に轉じて同教授の批判に於ける重要な諸點に論及しようと思ふ。

序ながら附言して置く。私は安井助教の所説に答へるといふ仕事を、利子論一般に關する近時の私見を組織的に論述しながらその中の一節として之を試みようと思つた。けれども此組織的論述は今直に之を實現しがたく、而も教授の批判を得て既に一年に近からんとしてゐる。此學問上の負債の償還既に遅延してゐることを考へ、これだけを執筆する次第である。

ヒツクスの利子決定理論を支持しがたき根本の事情は主として次の二點にある。貨幣の流通が考慮せられてゐない。従つて貨幣の保有又は所持 (holding) とその保藏 (又は退藏 holding) とが區別せられて居らず、此二者が混同せられてゐる。貨幣の流通する姿が把握せられざるがゆゑに、保有から區別せられたる保藏の概念が明にせられず、従つて保藏概念を一の基礎とする貸付資金説に對する態度が認め難きものとなつてゐる。本來私はヒツクスの經濟理論の卓越せる貢獻を承認することに於て何の躊躇をも示すものではない。けれども其所説の難點は難點として認めることが研究の歩を進める上に於て缺くべからざる用意であると思つてゐる。其第一の難點は經濟

生活に於ける社會的側面の理解の不足してゐることである。此點は英國經濟學の傳統に由來する。經濟學の成立發達が功利論的地盤の上に行はれてゐたが爲に、社會的背景についての反省が著しく不足してゐる。厚生經濟學の如きはこのことの必然的な結果と見られないであらうか。此難點についての私見は之を勞銀論乃至失業の分析に關聯して説明した¹⁾。第二の難點はその貨幣觀にある。これは密接に其社會的側面の理解の不足と結びついてゐるのではないかと思ふ。こゝにはそのことの論述をさける。たゞ若し人あつて、コンモンスの『制度的經濟學』に於ける貨幣の説明を讀みたる後に、ヒツクスの貨幣觀ことに貨幣と證券との聯絡に關する見解を讀むならば、私が何故にかゝる言を敢てするかを直視して誤らぬであらう。此貨幣觀と必然なる聯絡はないまでも、それとの自然なる聯絡に於て貨幣の流通の面に十分なる考慮が拂はれてゐない。勿論私は前論文に述べたるが如く、ヒツクスの利子決定論を其貨幣に關する所見から切離して獨立の考察對象とすることを否定するわけではない。けれども、其利子決定論がかゝる貨幣觀に若干の地盤をもつことは之を看取し得ると思ふ。たゞこれら二の難點に關する私見は、茲に述べたる範圍に於ては組織的論述ではなく、感想の列擧の域を脱しない。たゞ私見の背景を幾分にも明にし、これからの所論の理解を容易にしたいとするに外ならぬ。

ヒツクス從つて之を支持せらるる限りの安井助教教授の立場に於ては、貨幣の需給が重要な觀念として取扱はれてゐる。ところが此概念内容が極めて不明確である。否、それに對しては何等の説明をも加へられてゐない。此貨幣需給が他の商品（物財又は用役）の需給と同一の列に置かれてゐる。一般商品（勤勞や諸種の用役を含めて）にあつては、其需給として欲望充足のために獲得し引渡さうとする數量が考へられる。此意味に於てならば賣買を交換と見るべきか否かについては根本的な意見の對立はあるにもせよ（例へばエルスター）、一應賣買を貨幣の供

1) 勢力説論集、七三頁以下。
2) 高田、ヒツクス利子決定論の分析、經濟學論集、第十二卷、第十一號、第十二號。

給需要として考へ得るであらう。而してヒックスに於て取扱はれてゐるものはこの意味に於ける需給だけである。ところが貨幣は全く特殊の財である。此特殊の地位はそれについて他の意味の需給の考へらるることを要求する。それは保藏、所望現金、實物残高、流通速度等の諸概念の何れかによつて把握せらるるものである。貨幣の手許用意の需要とそれに對する供給といふ意味に於ける貨幣需給である。若しこれに貨幣需給の名稱を拒まうとするならば、之を表はすに保藏又は流通速度等の何れの名稱を以てするも差支はない。かくて一般均衡に於て貨幣が充してゐる條件には一方授受の均等といふ意味に於ける需給の均等があると思はるるが、他方また所望現金需給の均等がある。後者は若し之を需給均等の方程式として表現したくないならば別の名稱を以て呼ぶこともいふと思ふ。前者は貨幣の創造がなき限り、貨幣の需給超過は零に等しいといふ表現の形をとる。これに對して後者は直接にか又は間接にか流通速度に關する規定を含む。これが間接なる規定といふことの意味は後に之を明ならしめたいと思ふ。而して此二の條件は其一方を他方に還元することを許さず、それらは全く別異のものと考えらるべきである。此點に於てヒックスがこの中の一方を他方と區別することなく、何れをも貨幣方程式 (貨幣

Money Equation) と稱してゐることは分析の不正確を示してゐると思ふ。³⁾

私が前論文に於てヒックス利子決定論に加へたる批判は論點極めて多岐に互つてゐるけれども、其中心論點はヒックスの利子決定理論に於ては貨幣の流通が十分に考慮せられて居らぬといふ點にある。而して安井助教がヒックスの所説の支持に終始せらるる限り、同様なる立場に立つものと考へる外はない。私はさうである限りといふ制限を加へてゐる。それは同教授が本來流通を考慮せられずといふのではなく、たとへばワラスの所望現金の考察に於て正確なる理解と精密なる分析を示してゐらるることはいふまでもない。ただ私見への批判に於ては

3) Hicks, Value and Capital, 1939, p. 150.

ヒツクスの支持に熱心なる餘りともいふべきか、貨幣の流通の姿をとり上げてゐられない。自ら創造貨幣を取入ることによつて貨幣の流通の面を十分に捉へたりと考へらるるが如きも、これは單なる錯覺ではないかと思ふ。ヒツクスに於ても、其所説を支持せらるる安井助教にありても、貨幣は流通する姿に於ては取扱はれぬ、流通を抽象せられたる貨幣はまことの貨幣ではあるまい。かういふ表現は如何にも獨斷の列擧のやうにもきこゆるであらうが、その理由乃至事情はこれからの分析によつて漸次に明にせらるることと思ふ。要するに、ヒツクスひいては安井助教の立場からは貨幣の流通が十分に把握せられず、従つて保藏が其視野の中に入り來らぬ。

三

ヒツクスの利率決定論の骨子はいふまでもなく次の諸點に盡きる。貨幣を含めたる n 個の財の中、貨幣以外の財の價格と利子との n 個の價格が未知數である。これに對しては條件として一個の財の需給均等方程式、及び貨幣のそれ、證券のそれといふ $n+1$ 個の方程式が與へられる。けれども、別に收支均衡の方程式が豫想せらるる限り、 $n+1$ 個の方程式中の任意の一は獨立ならぬものとして他のものから導き出される。それゆゑに、 n 個の未知數に對して n 個の方程式があるわけになる。他の價格と同様に利子も亦決定せられる。たゞ此場合消去せらるる方程式は證券需給均等の方程式であることを得べく、また貨幣需給均等の方程式であることを得る。若し前者であるときには一應、利子は貨幣需給を均等ならしむるところに定まるといひ得るし、後者であるときには一應、利子が證券需給従つて資金需給を均等ならしむるところに定まるといひ得る。何れをとるかは一に選擇の問題である。故に、利子は證券の需給によりて定まるといひ得るならば、同様なる權利を以て貨幣需給によりて定まるといひ得る。

此場合に於ける貨幣方程式 (the money equation) は常に貨幣の純獲得は零に等しいと云ふ形を以てあらはされて居り、其意義に於て貨幣の需要は其供給に等しきものとせられてゐる。かくて此方程式は常に次の形を以て示される。 $\text{net acquisition of cash by trading} = 0$ or $\text{acquisition of cash} = 0$ 。さてこの貨幣の需要といひ供給といふことが一體何を意味するか。此貨幣方程式の示すところは、期末に於て見るに、貨幣の授受相等しく、社會全體を通じて見るに、取引に於て引渡されたる貨幣のみが受領せられてゐるといふことである。而して此點からいふと他の諸財とは全く同列の地位に置かれてゐる。

$\text{net acquisition of cash by trading} = (\text{value of output} - \text{net expenditure by private persons}) + (\text{receipts of private persons} - \text{value of input} - \text{dividends} - \text{repayment of old loans}) + (\text{borrowing} - \text{lending})$ ⁴⁾

と云ふ收支均等方程式を前提として、他財市場に於ける需給均等を條件として、 $\text{acquisition of cash} = 0$ と云ふ結論即ち貨幣需給方程式を導き出したると全然同一の手續を以て任意の一財例へばパンの需給均等方程式 $\text{net acquisition of bread by trading} = 0$ or $\text{demand for bread} = \text{supply of bread}$ を導き出し得るはずである。而して期末に於ける均衡状態の記述として一財の需要總額が其供給總額に等しいといふことからは其財の流通について何ごとをも示し得ざると同様に、かゝる意味に於ける貨幣需給の均等は貨幣の流通について何ごとをも示してゐないであらう。

さて、これだけを前提として置いて、ヒックスの利子決定理論中、貨幣數量説を取扱へる部分を吟味しよう。此取扱に於ては明に、貨幣が一方流通手段であり、他方標準財(かつて本位財とも價值尺度ともいつた)であると考へられてゐるが、たゞ此場合、補助的標準財がとり上げられて居る。而して問題の取扱方法は此財が標準財である

4) *ibid.*, p. 157.

5) *ibid.*, p. 157.

場合と異なつてゐないと思ふ。私はかつて貨幣が流通手段であり、標準財として他の財が選ばれてゐる場合を取扱つたが、二の場合の理論的取扱の構造はまづ同一のもので見たい。それゆゑに安井助教が次の如くにいはるる事は、ヒックス自身必ずや之を承認しないであらう。「高田博士はヒックスとは全然異なる構想を以てヒックスを批判しようとするのである。博士のごとく貨幣から區別された標準財の存在を考へるときには、それはもとより「商品である點では他のすべての商品と異なる點がない」から「單に貨幣を以て賣買せらるべき商品」となるのは極めて當然である。けれども、このことはヒックスとは何の關係もない。私見によれば、ヒックスの補助的標準財を貨幣以外に求めるといふ「取扱の方法」は前述の如く實質に於て貨幣以外の財を標準財と定むる場合と同一である。少くも未知數と方程式との關係、一義的解決の點に於てはそれと異なるところはない。ヒックスと何の關係もないのではなく、餘りに密接なる交渉を有するはずである。

ヒックスの貨幣數量説に關して述べたところを吟味したいと思ふ。以下述ぶるところは其意見の骨子である。貨幣方程式が價格決定の機構の有効なる部分として用ひらるるときには(註、これは貨幣方程式が消去せられずに殘されてゐるときには、と解せらるべきである)、何れか他の方程式が消去せられてゐるはずである。貨幣方程式が一般物價水準を決定することになつてゐる貨幣數量説に於ては、他財の相對價值が獨立に(註、一見貨幣からは獨立であるやうに)定まり、貨幣方程式はそれらの貨幣價值(註、絕對價格を指す)を決定する爲にのみ必要とせられる。けれども相對的價格といへどもある標準によらずしては之を決定しがたい。かくて諸財の價格はまづ何れかの補助的標準財によつて決定せられ、然る後に、貨幣方程式は補助的標準財の貨幣價值、從つて貨幣の價值を決定することとなつてゐる。なほ一の過剰の方程式はあるが、それは貨幣方程式ではなくして、補助的標準財(古典學派に

於ける不熟練労働、又は現代の著者に於ける代表的消費財の需給方程式である。

このヒックスの取扱へる場合こそ私の取扱はうと意圖したところであり、従つて私の取上げてゐる構想は實質に於てヒックス自身の正に當面してゐるところである。

此點に關するヒックスの所見を側面から見て再説しようと思ふ。ヒックス自身の述べたる方程式組織に於ては n 個の財の中一個だけが貨幣であり、同時に標準財である。私は此標準財がそれ自體素材價値を有するか否かによつて方程式組織が異なるべきものであると思ふが、今の場合、安井助教授に従つて不換紙幣を扱ふものと解しながら論を進めて行く。此場合、未知数は利子を含めて n 個、方程式は貨幣を含め進みて證券を含めて $n+1$ 個の需給均等を示せるもの $n+1$ 個である。方程式中任意の n が收支均衡を前提とすることによつて消去せられる。貨幣方程式を消去するときには、利子は證券需給によつて定まるといひ得べく、證券方程式を消去するときにはそれが貨幣需給によつて定まるといひ得るであらう。資金説の如くに主張するか、流動性説の如くに主張するかはたゞ選擇の問題である。ところで貨幣數量説に於て、消去せらるるものは補助的標準財の需給方程式であつて貨幣方程式ではない。これは貨幣の價値、一面からいふと、補助的標準財の價格を定むるものとして残る。

こゝで考へたい論點が幾つかある。第一に貨幣數量説に於ける貨幣方程式といふものは何であるか、それはヒックスの説明しつゞけてきた貨幣方程式と同一のものであるか、否か。又それが異なるものならば、二者何れも選擇的に消去せられうるものであるか。第三、それらを離れても貨幣方程式を残してパンの需給方程式を残すとき、それは何ごとを意味するといふか、數式の上から事態の法則的説明の上に何を發言し得るか。

四

6) *ibid.*, pp. 158-159.

貨幣數量説に於て、貨幣の價值を、逆にいふと補助的標準財の貨幣價值を決定するが爲に一の方程式が利用せられる。其代表的なるものはフィッシャの交換方程式であり、またディヴィジアのそれであり、進みていへば所望現金や、實物殘高乃至流動性等の何れかに關する方程式である。さてこれとヒツクスのいはゆる貨幣方程式とは異なるものであるか。ヒツクスにあつては、何れも貨幣方程式と稱せられて居り（而も單數の定冠詞をもつてゐる點から見ると、別々のものとは考へられてゐない。率直なる結論としていへば、二者ともに一の貨幣方程式として考へられてゐる。

ところでヒツクスのなる貨幣方程式と數量説的貨幣方程式とを對比して見よう。後者は最も平明なる、而して代表的なるフィッシャのそれについて見ると一方には取引高と、他方には貨幣の數量及び流通速度の積との相等しきことを示してゐる。それは貨幣流通の要素をとり入れてゐる。横斷的瞬間寫眞的把握によるところの實物殘高方法に於ても、貨幣流通乃至手持の様相がとり入れられてゐる。而してこれらは貨幣の動きに關するところの期間の平均状態を示すか平均流通を示してゐる（流通速度、滯留期間、實物準備等）。これあるがゆゑに、補助的標準財を以て測定したる全取引數量がどれだけの貨幣價值總額をもち、従つて補助的標準財單位がどれだけの貨幣價值をもつかと決定せられる。ところでヒツクスの方程式組織に於ける貨幣方程式、詳言すれば貨幣供給均等方程式は何であるか。それは反覆して述べたるが如く、次の如き表現をもつ。acquisition of cash = 0。これは實質的に見て、貨幣供給數量の一定即ち $PO = MV$ に於ける M の一定をいふだけのことであり、流通速度 V 又はそれと表裏するもの（たとへば k ）については何ごとも云表はさぬ。不換紙幣が流通する以上、その流通速度又は實質に於てそれと表裏の關係にある何等かの數量は未知數として、均衡に於てはじめて一定の値をもつものと考ふべ

きではないか。これが貨幣として役立つところの財の他の商品とことなる点であると思ふ。貨幣といふ財は必然に流通し(その裏面をいへば保蔵せられ)、従つて流通速度が同時に決定せられぬ以上、一般均衡といふものゝ成立することはない。これが未定のまゝに置かれて諸價格の決定はないと思はれる。

要するに問題は acquisition of cash といふ所謂貨幣方程式と $PO \parallel MV$ 又はこれと同一の實質をもつところの何等かの方程式、いはゞ流通方程式との關係に關する。前者が後者と同様に流通状況を表明するもの、同一の内容をもつものであるならば、私の批判は全く考へ直されねばならぬであらう。

そこで貨幣と標準財との相分るゝ場合に關するヒックスの見解として安井助教授の展開せられたるところに従ふと、此貨幣方程式が次の如き位置を占める。

未知數

方程式數

標準財(本位財)であらはされた財および用役(貨幣を除く)の價格	(n-2)
標準財であらはされた貨幣の價格(即ち貨幣價值)	1
(貨幣の價值。筆者註)	1
利率	1
合計	n

財および用役(標準財および貨幣を除く)の需給均等方程式	1 (n-2)
標準財の需給均等方程式	1
貸付資金の需給均等方程式	1
貨幣の需給均等方程式	1
合計	n+1 ⁷⁾

『この一覽表を(中略)ヒックスに關する一覽表(註)。貨幣がそのまま標準財である場合に關する未知數と方程式とを對比したる一覽表』と比較するとき、兩者の差異は一見して明瞭であるであらう。高田博士はヒックスとは全く異なる構想を以てヒックスを批判しようとするのである。』これが安井助教授の主張であるが私はこれについて次の如

7) 安井、前掲、六八頁。
8) 安井、前掲、六二、六四頁。

くに述べたい。私の構想したる場合はなるほど實質に於ては未知數と方程式數との關係全くこの通りである外はない。而もこれまさに實質に於てヒツクスの既に貨幣數量説に關して述べたところである。此表に於ける標準財が補助的標準財と置きかへらるゝだけで十分であると思ふ。そこで此方程式組織について如何に考ふべきであるか。形式的には未知數と方程式數とが如何にも一致する。けれどもそれは此表の上のことである。方程式の内容そのものはかゝる斷定を許すであらうか。私見は簡單である。こゝにあげられたる形に於ける $new\ cash = 0$ といふ貨幣方程式は獨立のものではなく、同時に「財および用役」の需給均等方程式（註。または安井助教の十分に展開せられたる形に於ける方程式組織についていふと貨幣以外の財の需給均等の諸方程式）中の何れか一がまた獨立のものではない。 $n+1$ の方程式中二が消去せられる。 n 個の未知數に對して一個の方程式が與へられる。貨幣價格の一義的決定は不可能である。此理由は其實貨幣數量の一定といふ所與の條件を述べたものであるに止まり、貨幣の流通狀況を示すものではなく、從つて生きたる方程式たる性質をもたぬことにある。

このことは、かゝる方程式組織をレオン・ワラスのそれに比較して明にし得ることと思ふ。私はかつて他の目的の爲に極めて單純化したるワラスの方程式組織を参照しつゝ考へる。前に『新利子論研究』第九章第三節に於て、それを十個の方程式群に縮約した。そこでは今の場合の財及び用役一中の一個、即ち補助的標準財（ワラスの場合にはこれが標準財として考へられてゐる）に關する方程式が消去せられ得る。更に進みて今の場合の $cash\ acquisition = 0$ といふ貨幣方程式はない。貨幣需給均等方程式は流通又は實物殘高を含むものとして居り、それは(2)(4)(5)(6)といふ「その中から任意の二が消去し得らるゝ」諸群の中には入つてゐない。それゆゑに $n+1$ の方程式中消去せらるゝものはたゞ（例へば）補助的標準財需給均等に關するものだけであつて、眞の貨幣需給均等方程式（いはゞ

交換方程式はその中に入らぬ。方程式數は n 個であり、貨幣價格が一義的に決定せられる。ワラス従つて私の見方にして正しくばヒツクスと安井助教との所見は誤りならざるを得ず、ヒツクスと安井助教にして正しくばワラスと私とは誤りである。而してこの何れが正しいかは $\text{cash acquisition} = 0$ といふヒツクスと安井助教との貨幣方程式が眞の貨幣需給均等方程式であり、従つて流通を示すものであるか否かといふ一點にかゝる。

收支均等の存するところ、而して貨幣數量が一定してゐるところ、得られたる貨幣は拂はれたる貨幣であり、 $\text{net acquisition of cash} = 0$ としふことは自明であり *tautologie* であり、何等の條件をなすものとは考へられぬ。かくて所謂流通方程式を省きて此方程式を入れたのでは、其實、未知數 n 個に對して方程式數一個となる。従つて流通方程式は除去せられ得る方程式ではなくして、貨幣の價値の決定にとり缺くべからざる方程式である¹と見るべきである。此點から見ると、貨幣に關する需給均等方程式を流通方程式と内容を近くするものと見る以上、それを他の諸財の需給均等方程式と同列に置き、その中任意のものが消去せらるゝものとして取扱ふといふ立場はどうしても成立する餘地なきものであらう。

五

これらの私見に基いて、安井助教の批評につき若干の附言をなしたいと思ふ。もとより主要なる論點は既に之を述べた。これから説くところはそれからの結論である。安井助教は私見の紹介の後に次に述べられてゐる。『これらの高田博士の言葉は私にとつては極めて理解し難しものを含んでゐる。すでに第二節で述べたやうに、ヒツクスの利子決定論、したがつてまた一時的一般均衡理論のうちで顧慮せられてゐる貨幣はつねに標準財即ち *numeraire* を兼ねるところの貨幣である。もしさうでなければ方程式數と未知數との整合に關するヒツク

スの説明は全く不可解なものとならざるを得ない。さうしてこの點は不換紙幣の場合といへどももとより變るところがない。』こゝで私見を繰返すことにする。ヒツクスの所論は貨幣が同時に素材價値を十分に伴ふものか、然らざるか、又然らずとしても標準財が別に存するかの區別について、明確なる分析を加ふところがない。而して實はこれらの場合を區分して所論を明にすべきであつたと思ふ。而してその見解そのままでは高々、例へば金貨のみが流通するが如き場合にのみあてはまり得ると思はれる。けれども、その場合とても金の生産が考へらるると必ずしもさうでなくなる。況や金以外の兌換券が流通する場合についてはそれが金生産を離れても無條件に肯定せらるべきや、そこに問題があらう。不換紙幣の用ひらるる場合については、標準財を無條件に貨幣として兼ねしむべきものとは考へられぬ。ワラスのなしたるが如く、ある財を以てこれにあてることも無論許さるべきことである。而してヒツクスは實質的には(補助的標準財を認むることによつて)之を認めてさへもゐる。その貨幣數量説に關して述べたところは、貨幣以外のものを標準財にとれる場合と條件及び未知數の關係に於て變ることのなきことは、前述の如くである。

ところでこの不換紙幣の場合に於て、未知數の一を標準財又は補助的標準財の標格から貨幣の價格にうつしかへるだけで、ヒツクス所説がそのままにあてはまるであらうか。それは前述の如く貨幣の需給均等方程式の性質に關する。ヒツクスは前述の如く acquisition of cash の方程式を以て之にあてると思はれる。それと交換方程式乃至流通方程式との間に本質的なる差異を認めない。之を明言しないが、さう解する外には仕方がない。さうである限り、私見は安井助教のいはるやうに、理解しがたきものを含むどころか、必然に承認せらるべきものではないかと思ふ。二者の混同が許されぬ理由は幾たびか述べたところであるから繰返さぬ。これに關して

安井助教の次の如くに述べらるるところは遂に首肯しがたい。『高田博士の採られるやうな構想に於ても方程式數は未知數を一個超過するけれども、もし此構想に私(安井氏)がさきにヒツクスに加へたやうな十全なる展開を興へるならば十個の方程式の中任意の一個は獨立ならざるものとして消去し得ることおそらく容易に證明することが出来るであらう。したがつてこれらの方程式のうちから標準財の需給均等方程式の消去が不能であるならば、同じことは貨幣の需給均等方程式についても言ひ得るはずである。貨幣需給(均等)の方程式が(標準財の場合と)同様にして他から導き出さるるやはあらためて問ふまでもない疑問ではないかとおもはれる。』これに答へていふ。安井教授は依然として貨幣需給均等方程式として acquisition of cash¹⁰⁾ を考へられてゐる。さうであるならば、私はその消去可能を信ぜざるものではない。否、それは貨幣量不變といふ前提の中にふくまれてゐることであると思ふ。けれども私は眞の貨幣需給均等方程式にあたるものは前述の流通方程式であり、貨幣の流通状況を示せるものであると思ふ。さうである限り、それはワラスの所説の中に於て然るが如くに、他の方程式から導き出されうるものとは考へられぬ。而して安井助教の加へられてゐる所謂十全なる展開は極めて明晰であり、又教へるところ多きものでもあるが、貨幣需給方程式として流通方程式をとる限り、貨幣需給方程式が他から導き出さるるやを問ふまでもないことは考へられぬ。

私の根本的態度について、同教授は次の如き主張を述べられてゐる。『ある條件の下に於ては(たとへばヒツクスのごとく貨幣數量の一定を前提する場合)は)一般的交換手段としての貨幣であつても、その需給が標準財の需給と同一の形式で表現せられることは止むを得ないであらう。兩者の表現形式が全く同一であることから、さうしてそのことのみから、貨幣はその實單なる標準財に過ぎぬといふ結論をひき出すことは不可能である。』

10) 前掲、六九頁。

私は思ふ。助してさうであらうか。同教授の論は次の如くに進む。『もとより貨幣が全く標準財と同一の形式で取扱はれ、それ以上を一步も出でないならば、たとへ一般的交換手段としての貨幣であつても、その交換手段的性格は少しも陽表的にとり上げられてゐず、單にその標準財的側面のみが考慮せられてゐるにすぎないから、この意味では貨幣の貨幣たる性格は方程式の表現の上では没却されてゐるといふことができる。高田博士の眞意はおそらくこの點にあるのであらう。さうしてそれは確かにヒツクスの理論の不備を衝いてゐる。』¹¹⁾こゝまでを承認せられたる同教授が、何故に私見の立場そのものを承認せられないであらうか。私は兩者の表現形式が全く同一であることから、さうしてそのことのみからの二段について考へたい。(a)表現形式が同一であるのみならず、(b)進みてそれ以外貨幣に關して其流通を示すところの條件又は方程式が示されてゐないことから、ヒツクスの所説を承認しがたしといふに過ぎぬ。所謂貨幣方程式は貨幣數量の増減のみを示して其流通を示さぬところの貨幣方程式はなし。

こゝから安井助教のヒツクスに對する辯護又は支持の工夫が企圖せられる。『しかしこの缺點はヒツクスにとつて致命的ではない。なぜなら後に示すやうに、私は銀行の貨幣創造の契機をとり入れることによつてこの難點を救ふことが出来ると思ふからである。』

安井助教のヒツクス利子決定論強化の根本は、銀行の貨幣創造をもちこみ、貸付資金の需給均等方程式及び貨幣の需給均等方程式をそれぞれ次の形に書き改むるといふことにある。

貸 金

原形 borrowing = lending

修正 borrowing = lending + money created

貸 幣

acquisition of cash = 0

acquisition of cash = money created

ヒツクス利子理論について

第五十七卷

五〇九

第六號

一五

11) 前掲、六六頁。

この點の詳細に立入ることは紙數の關係上次の機會に譲りたい。ところで此場合に於ても最後の貨幣需給均等方程式は獨立ならざるものとして消去せられ、方程式數と未知數とは一致し、問題の解決には何の支障もない、同じ論證が此式のみならず、修正せられたる方程式組織の他の部分についても同様に云ひうるから、ヒックスの主張は此場合にも成りたつ、而して此修正によつてヒックスに對する私の批評がすべて否定せられうる」といふのが其見解の筋道である。¹²⁾ 同教授によると『貨幣創造の事實はたしかにヒックスの理論的部分的修正を必要ならしむるけれども、この修正はヒックスの理論を弱めるものではなく却つて強めるものである。¹³⁾ その理由。『右の修正されたヒックスの理論にあつては、貨幣の需給は收支均等の方程式とは別個に、方程式(D) (註。 acquisition of cash-created money) によつて與へられてゐる。さうして銀行の創造する貨幣が交換手段ならざる標準財である¹⁴⁾ と見做すことはもとより不可能である。それゆゑ右の理論は常に貨幣の標準財的性格のみではなく、その交換手段的性格をも明白に顧慮してゐると言ふべきであらう。』¹⁵⁾ けれども私から見ると、銀行の貨幣創造を方程式組織の中に入るといふ同教授の企圖には、全幅の賛意を惜まぬけれども、それによつてヒックスの所論が強化せられ得るとは考へ得ない。なるほど、創造貨幣は明白に交換手段である。けれども交換手段である以上は其流通狀況が考へられねばならぬ。創造貨幣は週の如何なる時期に創造せられ如何なる時期に吸收せられ消滅するかが均衡の形に影響をもつと思ふけれども、それは茲に別の問題としよう。少くも貨幣である以上、創造せられたると否とに論なく流通狀況をもつであらう。それが正貨流通の場合の如く、あくまで受動的、非獨立的数量であるならばとにかく、然らざる限り、流通狀況を抽象して均衡状態の内容を考へかたきはずである。而して創造貨幣の數量のみが取扱はれてゐる方程式によつて、われらは依然として其流通狀況を知ることを得ぬ。同教授のヒッ

頁。頁。
二一頁。
七七四
七七四
前前
掲、掲、
前前
12) 13) 14)

クス支授の企圖が其目的を達してゐるとはいひがたいと思ふ。

私が安井助教授の批評に對して答へようと思ふ要點の一は利子に關する資金説にある。これについては私見が全面的に同教授の見解から離れてゐるやうである。卒直にいふと教授同の立場からは貨幣の保藏の事態が捕捉し得られぬと思ふ。之を問題としたい。ヒックス理論と貸付資金説(の代表的形態)とが同一内容のものであるといふ同教授の所説に對しても異見をもち、又貸付資金説が部分均衡論であるといふ其所説に對しても異見をもつ。異見の根據は、貨幣の流通を十分に考慮するならば私見の如くに考へる外なしと信する點にある。たゞ小論、一篇すでに意外の長さになつたから筆を更めて之を論じ、重ねて教授の教示を仰ぐことにする。多忙の執筆にかゝり私見に粗漏の點も多いと思ふ。同教授の批判を得たいと願ふばかりでなく、ヒックスの立場に贊同する他の學者の教示をも願いたいと思ふ。私は自ら納得のいくまで私見を反覆したいと念願してゐる(昭和十八年十一月二十二日朝)。

これから經濟論叢の紙面を得る機會が減するばかりでなく、本來此問題に關する私見も安井助教授の批評も經濟學論集に於て公にせられてゐる。其關係上、次の論文は之を同誌に寄稿するつもりである。なほ本論文執筆の際、私は自らの前論文を全く讀まなかつた。前後の所説の聯絡については次の機會に考察したい。